

かたはらさびし

「春のひかりを見給ふにつけても、いとどくれまどひたるやうにのみ、御心ひとつはかなしさのあらたまるべくもあらぬに」にはじまる、源氏物語の「幻」の巻は、紫の上のなくなつたあと、老源氏の悲しみの深さを叙した巻であるが、これを読みながら、一人の人間の存在の重みをあらためて思い知らされるのが常である。

女三の宮が六条院に降嫁して三日目の夜が明けようとする暁、残りの雪の上に、さらに雪片の舞う寒さの中を、源氏は、夢に現われた紫の上の面影に引き寄せられるように、西の対に帰つてきた。格子の外でしばらくためらっていると、わが身も冷え入るようにおぼえる。思い切つて中にはいると、紫の上は平素に変らぬおおらかさを装いながら、涙にぬれた袖をそつとかくし、悲しみをまぎらしていた。——これは、「若菜」上の巻の一場面である。源氏は今、あのときの紫の上の心用いを、とりわけあわれに思い起すのであつた。明け方ちかく、宿直をすまして、自室に下がってゆく女房であろう、「いみじうもつもりにける雪かな」という声が聞こえてくる。

それを耳にして、源氏には、紫の上を悲しませた、あの暁のことがせつなく思い出されるのであった。そのときの源氏の心事を、作者は代って、「御かたはらのさびしきも、いふかたなくかなし」と述べている。

「かたはらさびし」という形容詞がある。用例はあまり豊富ではなく、源氏物語だけでいっても数例しか見当たらない。かたわらに人のいないさびしき、多く独り寝のさびしきをいう言葉である。ここではそれが一語としては用いられていないが、意味は同じとみてよい。

「かたはらさびし」は、文字通りにとれば、かたわらに人のいないさびしきということになるが、空圍のさびしきに多く用いられていることからわかるように、寝所をとにもする愛人のいないさびしきをあらわすのにふさわしい言葉である。その人がわがかたわらに存在しないことの意味が、底知れぬ空洞のふちに身をおくときのような、危険で不安定な心情をよびます。それをこのような言葉であらわしたのである。自己の存在の壊滅——死への志向も、そういうときに萌すことがある。無からのいざないであろうか。

源氏が紫の上を喪ったあとの心情を、「御かたはらのさびしきも、いふかたなくかなし」と、作者が代わって述べたのは、十一年前の雪の暁の記憶が、折も折降りつもった雪におどろく女房の声によって、せつなく蘇らされ、いまさらに紫の上の実存が、源氏にとってかけがえのないものであったことを語るものである。

そのとき、源氏の口をついてつぎの歌が詠まれる。

うき世にはゆき消えなむと思ひつもおもひのはかになほぞほどふる

「ゆき」に「行き」と「雪」を、「ふる」に「経る」と「降る」をかけているのは、別に珍しい修辞ではないが、「行き消え」には、俗世から姿を消して出家する意と死んでゆく意とがこめられ、そのときの源氏の本心がまさにこの語に諷示されているといつてよい。したがって、この語からわれわれは、出家と死への心の傾斜に堪えてなおも生きつづける自分を、意外な思いでかえりみている源氏の姿を想像することができる。

「かたはらさびし」は、事新しく取り上げるまでもないようにみえる言葉ではあるが、源氏物語「幻」の巻を読んでいて、右の叙述に出くわし、紫の上を喪ったあとの源氏の悲しみの深さを的確に言いあらわしているように思ったので、ここに心おぼえのつもりで、書きとめておくことにした。

(四五・五)